

能登から世界へ。さりげない 障害者雇用で2%超

—石川サンケン株式会社—

職場
ポ

EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



石川サンケン株式会社

〒925-0151 石川県羽咋郡志賀町梨谷小山ハ-5
TEL 0767-32-8111 FAX 0767-32-5777

能登に五工場。
半導体製品を世界へ

能登から世界へ——。能登半島のちょうど真ん中近くに「石川サンケン株式会社」がある。一般ユーザーの目に触れない半導体製品を生産しているため、知名度は高くないが、能登半島に五つの工場があり、従業員は一六〇〇名という地域のリーディングカンパニーだ。その製品は世界に輸出され、自動車をはじめ、情報OA機器、テレビやオーディオ、エアコンや冷蔵庫……と、私たちの身近なものに幅広く利用されている。

JR羽咋駅からタクシーで約二〇分、志賀町の中心部に入る。志賀町には本社・堀松工場と志賀工場がある。全体的なお話は本場で、現場の取材は最も従業員



和泉清副社長・総務人事部長

石川サンケンで製造する各種エレクトロニクス製品に使われる半導体は、自動車のエンジン関係が約四割を占め、中でも輪島市の町野工場で製造する自動車オルタ用ダイオードは世界の半分近くのシェアがある。〇四年からは液晶テレビのバックライト用光源の冷陰極蛍光管も生産している。



藤井正行滋賀工場長

員数、障害者数が多い志賀工場で行った。石川サンケンは一九六四年、石川県の企業誘致に応え、志賀サンケン工業として、現在の志賀工場の地に設立された。その後、門前・町野・白山・内浦の各サンケン工業ができ、一九七八年に五社が合併して、石川サンケンとなった。グループ会社の「サンケン電気」は一九四六年の創立で、日本の電子産業の歴史とともに歩んできています。

志賀工場長の藤井正行さんは、一九七一年に入社した。「六四年に工場ができたころは、若い女性が手作りでテレビのダイオードを生産していました。三〇〇人ぐらいの女性ばかりの工場でした。その後、トランジスタからICへと、売り上げは拡大、拡大で成長してきましたが、ITバブルが終わってからは若干、水平に推移しています」

障害者は五工場合わせて二二名。雇用率は、重度障害者（心臓、腎臓など）をダブルカウントすると二%を超える。本場で、副社長・総務人事部長の和泉清さんにお話をうかがう。

「二〇〇三年度以降、雇用率はほとんど二%を超えています。いちばん高かった昨年度は二・四五%でした。特別に障害者の雇用を意識してはいないのですが、養護学校からの紹介、地域からの問い合わせなどがあれば、できるだけ雇用してきました。会社設立の趣旨に、地域の雇用の確保があります。過疎対策からスタートしていますので、その責任として地域に貢献しなければいけないと思っています」

中途障害になっても
職場復帰

約六五〇名の従業員がいる志賀工場に



は、障害者二二名（聴覚二名、心臓二名、肢体不自由八名）が働いている。
 まず製造一部製造一課へ。勤続二年の木下正一さんは、設備保全を担当する。木下さんは四年前、心臓の血液を送り出す弁の手術をして人工弁に変え、同じ仕事に復帰した。
 「私は障害者手帳一級です。二カ月前よつと会社を休みましたが、その間は一



多くの障害者が働く志賀工場

人減を周りの人たちにカバーしてもらいました。復帰して一カ月間は日勤だけ。二カ月目から早番遅番の二交代勤務で、深夜勤務は外してもらっています」
 工場は二四時間稼働していて、通常は四班体制で勤務する。早番は五時から一三時五分まで。遅番は一三時五分から二一時まで。その後から朝までが深夜勤務となる。
 「心臓に負担をかけないように血液をサラサラにする薬を飲んでいますが、以前よりは疲れやすくなりましたが、メンテナンスの仕事は重いものを持って移

動することはありません。水分不足にならないように注意していますが、汗をかくこともありませんし、以前と同じように仕事をしています。月一回、平日に病院に行くので、事前に申請をして休ませてもらっています」
 製造一課長の小堀肇さんが木下さんの上司だ。

「私は昨年、製造一課に異動してきましたので、手術後の付き合いですが、日々の仕事は、普通の人と変わりません。病院に行くときは事前に申請してもらいますので、そのときはみんなでカバーしています」
 事務部門の製造技術課で働くのは藤田和子さん。パートから社員となって、勤続三〇年。社員になってからは二四年で、今年一〇月に定年を迎える。

「日・祭日が休み、土曜日が半日ですから、子育てをしながら勤め続けてもらえました。現場で仕分け発送作業をしていましたが、両足が人工股関節になってからは、立っての作業がたいへんになりました」
 ○二年に二度目の人工股関節の手術をした。藤田さんが手術を受けたところ、現部署の前任者が退職。その後任として異動し、配布ファイルのデータ入力を行っている。

「現場でもパソコンの入力作業はしてました。足に無理がききませんから、

WORKSHOP REPORT



木下さんの体調を気づかって仕事を進める小堀肇製造一課長（写真左）



設備保全を担当する木下正一さん



居田俊一製造技術一係長と話す藤田さん



両足が人工股関節の藤田和子さん。製造技術課で事務の仕事をしている

長年勤続で 仕事はベテラン

現場を回っていると、工場長の藤井さんが従業員とごく自然にやりとりをしている。社内の風通しはよさそうだ。

「障害のある人たちはみんな長く勤めていますし、仕事も同じようにしていますから、分担して働いているという感じで、特別な意識はしていません。私もみんな同じようにお付き合いをしています。困ったことがあったら、上司に相談していると思いますし、私がかたまたま通りかかったときに話をされたりもしますが、こうしてほしいという希望があれば、応えています。現場は、風通しは

退職しなければならなかったかと思ったのですが、現在の仕事に配属になりましたので働き続けることができました。重いものはたいへんだろうと、周りの方が持つて下さいます。会社には長年、よく私を使っていたいただいと感謝しています」
はつらつとしていて、とても定年になるとは思えない。上司は、製造技術一係長の居田俊一さん。
「よく仕事をしてくれますから、助かっています。前任者が退職したとき、どうしようかと困ったのですが、藤田さんが入ってくれたおかげで、仕事はスムーズに進んでいます。定年は残念ですね」

いいと思いますよ」

続いて製造二部製造三課へ。工場内の機械は自動化されているので、人影は少ない。小泉外幸さんは勤続一六年。左上下肢に障害があるが、製造三課の中でいろいろな仕事をしてきた。

「仕事は、昔に比べるとだんだん忙しくなっていますから、少しいへんです」

上司は、製造三課長の辻恒一さん。

「足が不自由なので、できるだけスペースのある場所で仕事をしてもらうようにしています。責任感があり、仕事が増えてもこなそうとがんばっています。限界を超えるとSOSが出ますので、遠くからさりげない配慮をするようにしています」

最後に製造一部製造二課へ。ここでは、里見美由紀さんが働いている。左上下肢障害六級。勤続二十一年で、ずっと同じ仕事を続けてきた。

「製品の出来栄の確認、書類の整理など日々忙しいですが、大変なことは特にありません。定年まで働き続けようと思っています」

製造二係長の大筆尚徳さんは、仕事ぶりに信頼を寄せる。



上司の辻恒一製造三課長の指示を受けて仕事をする小泉外幸さん（写真右）。左上下肢に障害がある

「不良があれば見つけてくれますし、最初に仕事をしています。たまに休日出勤があるので、協力してくれそうですね」工場長の藤井さんは、聴覚障害者と働いた経験がある。

「私が班長だったとき、聴覚障害の人と一緒に働きましたが、口話でわからないときは、紙に書いてコミュニケーションをとりました。月一回の工場の全体集会では、手話通訳を頼んでいます」

管理課長の大石守さんは、障害者の雇用管理も担当している。

「何かあったら話してくださいと言っていますし、廊下ですれ違ったら声をかけるように心がけていますが、みなさん勤続が長いので、私のほうに話しかけてくれますね。木下さんは機械保全技能士の資格をとって、リーダー的立場で仕事



勤続21年のベテランとして活躍する里見美由紀さん

をしています。仕事が過度にならないように気をつけています。障害のあるみなさんも、職場の中では障害に関係なく働いていると思います」

特別扱いはせず。 法定雇用率は死守！

労働条件、賃金などはすべて同じ。会社として必要な資格は、障害のあるなしにかかわらずなく、挑戦できる。ちょうど



中谷政浩人事課長



大石守管理課長

機械保全技能士の勉強会が行われていたが、木下さんのように資格をとった人も、挑戦中の障害者もいる。総務人事部人事課長の中谷政浩さんの話。

「社員の平均年齢が高いので、中途で障害者の認定を受ける人も増えてきていますが、そのために解雇するということはありません。本人が働きたいと希望すれば、継続雇用をしています。できるだけ職場異動をしないように環境を整備したいと考えていますが、心臓に障害が出

た場合は電磁波の問題などがありますから、職場の状況を調査して、必要な場合は本人と相談をして異動も進めています」

人事として、配慮していること。「中途で障害者になって長期に休むと、退職しなければならぬのではという不安があると思いますから、『こういう扱いになりますからしっかり治療して下さい』とか、『現場復帰はいつにしましょうか』など、休職中のフォローはしています。働き始めたら、人事として配慮することは特にありません。各工場長が、工場の中で対応しています」

中途で障害を持ったとき、職場復帰ができるという言葉があるのは、復帰への心強いエールになる。工場長の藤井さんは現場の責任者として。

「足を手術した人は、足が不自由でもできる外観検査に異動するとか、設備も和式トイレでは都合が悪いという場合は洋式に直すなどの配慮はしています。身体に障害があっても、できる仕事はたくさんあると思いますから、障害者の雇用は増やしていきたいと考えています」

副社長・総務人事部長の和泉さんは、障害者雇用について。

「障害者も健常者も、中途で退職する人は少ないですね。会社に勤務していて、身体障害者になったことを理由に辞めていただくことはありません。職種の配慮はしますが、そのほかは特別扱いをしないほうがいいと思っています。給与、待遇、社内教育は同じです。志賀工場は、食堂棟を建てるときにエレベーターを設置しましたが、特に意識をしていませんから、後で『あれもやっていた……』という感じですね。『法定雇用率は死守せよ』と話していますが、これからも障害者の雇用は自然体でやっていきたいと思っています」

さらに、会社の将来について。

「歴代の経営者が地域を大事にしながら、人、社員を大事にしてきました。仕事量はあるのですが、製品の競争相手は世界ですから、価格競争は厳しいです。いいものを作り続けて、『地域から、世界へ』と羽ばたいていきたいと思っています」

工場を回ったとき、上司と部下、障害のあるなしに関係なく、自然な会話が行き交っていた。社員が中途障害者になったとき、職場復帰は当たり前と、障害者雇用も自然体だ。

石川県の製造業として、最大手の一社。地域の雇用を支えているという、地域に貢献するという、地元企業としての心意気が伝わってきた。